



研究集録32

神戸大学発達科学部附属養護学校

(Citation)

研究集録, 32:0-7

(Issue Date)

2006-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009933>



研究集録32

2005年度 研究・実践

障害を見つめ、発達にそくし、生活実態にねざした
科学的な障害児教育実践の創造

神戸大学発達科学部附属養護学校

は じ め に

校 長 廣 木 克 行

『神戸大学発達科学部附属養護学校研究集録』No.32をお届けします。

本書は私が本校の校長に赴任して初めて世に問う『研究集録』です。もちろん自らの実践と研究を基に執筆しているのは本校の教師たちであり、私はそれを理解し励ますことしかできません。そうして過ぎ去ったこの1年の間に、本校の教師たちは三つの大きな課題に真剣に取り組んできました。1つは前校長・二宮厚美氏の励ましの下で自分たちの実践をまとめた本を出版したこと。2つ目はその内容について教師たちが互いに理解を深めるために、一章ずつ読み合い学び合ってきたこと。そして3つ目は、公開の研究協議会を開催し（05年11月19日）、多くの障害児教育関係者の参加を得てその本に記した本校の実践と研究の成果を見てもらい、批評していただく機会を持ったことです。

既にご存知の方が多いと思いますが、本校の教師たちがまとめた本の題名は『コミュニケーション的關係がひらく障害児教育』（青木書店）です。

赴任した直後から、校長としての私がまず取り組んだのはその本のゲラを読むことと、限られた学校滞在時間内にできるだけ先生たちの声を聞くことでした。それを通して私が気づいた本校の特徴は、本の題名が示すように教師と子ども、子ども同士、そして教職員相互のコミュニケーションが豊かで笑いと歓声が絶えないこと、そしてその関係を発展させるために年間を通した計画的な集団づくりが取り組まれていることだと言えます。

それをもう少し具体的に言うと、本校の教師たちはすべての教育活動を通して、子どもたちの間に人間としての双方向的なコミュニケーションが成立する関係づくりに大変な力を注いでいるということです。しかもその中で、とても個性的な一人ひとりの子どもにコミュニケーションを成立させる力を育てようと努力しているのです。それは自分が伝えたいことを自信を持って表現できるような力を引き出すことであり、同時に相手が伝えたいことをしっかりと聞いて受け止めるために、相手の状況や気持ちを推し量って理解しようとする姿勢と力を、自分自身の姿を通して一人ひとりの子どもたちに伝えようと努力している、ということができます。

こうしたコミュニケーションの発達は、本来あらゆる教育が追求すべきテーマですが、なかでも知的障害を持つ子どもたちが学ぶ養護学校でそれに取り組むためには、子どもに働きかける教師自身の実践に向かう姿勢と力が厳しく問われざるを得ません。教師がどれだけ深くそしてしっかりと子どもの発達状況を見極め、子どもの言動の意味と心理を読みとれるか（子ども観）。そして子どもに伝えたい内容（教材）をその子ども観から見直し、それを伝えるために共感的に分かり合えるような表現とパフォーマンスを創り出せるかが問われます。つまり教師たちには深く確かな子ども観と教材観が求められ、それに基づく表現とパフォーマンスの臨機応変でしかもしなやかな豊かさが求められるということです。

この研究集録は、上に記した諸課題に真剣に取り組みながら本校教職員集団が到達した現在の力を映す鏡といえるものです。1人でも多くの方の目に触れご批評いただければと願っています。

も く じ

はじめに	学校長 廣木 克行.....	1
本校研究実践活動の概要		4

第Ⅰ部 第17回研究協議会報告

コミュニケーション的関係をひらく教育実践と特別支援教育

第17回障害児教育研究協議会の概要とまとめ		9
コミュニケーション的関係をひらく教育実践と特別支援教育		12
「コミュニケーション概念と教育労働」二宮厚美氏講演記録		14
分科会報告		
第1分科会 教科とコミュニケーション		26
第2分科会 学びあい、育ちあえる集団づくり		39
第3分科会 物をつくって自分をみがく生産学習		65

第Ⅱ部 各学部のとりのくみと各種諸活動

小学部

教育課程と集団編成、児童の障害と発達の状況		67
小学部研究と実践の報告		69
ことば・かず・あそびAグループ	佐藤 知子	75
ことば・かず・あそびBグループ	山本 君恵	87
ことば・かずCグループ	西堂 直子	93
学級活動「小学部低学年集団の学級づくり」	佐藤 知子	100
えがく・つくる「ガウディの城をつくろう」	山口 和彦	107
運動会「リズム走・ころがし走のとりのくみ」	本田 旭	109
附属明石小学校との交流		113

中学部

教育課程と集団編成、生徒の障害と発達の状況		115
中学部研究と実践の報告		117
運動「からだを楽しくいっぱい動かそう！」	井上 さみ	121
学部活動「楽しみながら、みんなのがんばりを寄せ合って」	松永 芳博	130
木工「つくる喜びを広げることを願って」	松永 芳博	134

高等部

教育課程と集団編成、生徒の障害と発達状況	139
高等部研究と実践の報告	141
学習発表会「みんな仲間だ！」	大谷 瑞枝 143
学級活動「卒業にむけてのとりくみ」	大竹 由美 147
生産2班陶工	柴田真砂代 150
生産3班陶工	市川 将人 155
生産4班木工	玉木 道弘 160
三木養護学校中学部との交流	165
木の根学園職員と高等部教諭との懇談会	166

学部以外のとりくみ

中高自治活動	長谷川 進 167
障害幼児親子教室（たんぽぽ教室）	西堂 直子 170

第Ⅲ部 校務・委員会の報告

障害児臨床実習の実際と諸課題	教務部会 173
学校行事のとりくみについて	指導部会 179
総務情報部のとりくみについて	総務情報部会 183
本校における介護等体験の推進	総務情報部会 186
保健委員会のとりくみと課題	保健委員会 191
進路指導の現状と課題	進路指導委員会 192
入学選考の実施と諸課題	入学選考委員会 195
おわりに	198

2005年度 研究実践活動の概要

研究推進委員会

研究主題

障害をみつめ、発達にそくし、生活実態にねざした科学的な障害児教育実践の創造

するとともに、障害児教育のこれまでの経験や蓄積をこれからの教育にどう生かしていくのか、私たちの実践が問われている。

1. 研究推進の基本的な方針について

(1) 障害児教育の現状と本校教育の課題

民主的で文化的な国家の建設と世界の平和と人類の福祉に貢献することを宣言した日本国憲法に則って、教育基本法は我が国の教育の理念を示している。「個人の尊厳を重んじ真理と平和を希求する人間の育成と個性豊かな文化創造を目指す教育」をうたった教育基本法は、障害児教育においても基本となる。

ところが、近年、憲法「改正」の動きと連動して教育基本法を変えようとする動きが急速に進んでいる。政府は、いじめ、不登校、中途退学、学級崩壊、学習意欲の低下などの原因を教育基本法の不十分さにあるかのようにし、「公共への参画」「郷土や国を愛する心」を加えようとしている。しかし、これは逆転した議論であり、教育基本法改悪を正当化するためのいいわけに過ぎない。

教育行政は「教育の目的を遂行するために必要な諸条件の整備確立を目標」として行われることを明記されているにもかかわらず、十分な教育条件の整備を行ってきたとはいえない。このことこそ、現在の問題状況の根元といえるのではないだろうか。教育基本法には、教育の目的として「人格の完成をめざし、真理と正義を愛し、勤労と責任を重んじ、心身ともに健康な国民の育成がめざされる」ことが述べられているが、これまで国は教育基本法の理念を生かしてこなかったと言わざるをえない。

これらの流れの中で打ち出されてきた特別支援教育の構想は、これまでほとんど支援の制度がなかった軽度発達障害の子どもたちの支援を開始する、と関係者に大きな期待を持たせたが、実際は「既存の人的・物的資源の配分についての見直し」で対応するとしている。つまり、従来規模の障害児教育の予算人員のままで、これまでの数倍もの子どもをゆだねることになるのだ。これでは十分な教育内容を保障できないどころか、これまでの教育の質の低下、後退につながることにになりかねない。

現在の障害児教育の内容は、関係者のたゆまぬ努力のなかでつくりあげられた大切な財産であり、決して後退させてはならない。特別支援教育の動向を丁寧に分析

(2) 今年度の重点課題

①教師集団の質の向上

昨年度は、コミュニケーション的理性について学びながら、本の出版にむけて本校教育の内容をまとめた。これまでの実践をまとめることは、コミュニケーション労働としての教師の役割、専門性について捉え直す機会にもなった。

今年度は、これらの内容をもう一度学内で論議し、深めていくことで、教師集団の質を高め今後の課題を明らかにしていくことにある。

②第17回研究協議会の開催

さらに今年度は、第17回障害児教育研究協議会の開催の年である。今回は本の出版記念の研究協議会と位置づけ、私たちがめざしてきたコミュニケーションの関係を開く教育実践について広く学外に提起していく。

③大学との連携

また、本校の独自性を生かし、大学との共同研究を進めていくことも課題である。大学とのコラボレーション委員会を有効に機能させることは、本校の教育実践を豊かにし、今後の障害児教育の展望を示す上でも重要である。

2. 研究推進委員会の任務について

研究推進委員会は、本校の研究推進活動全般を円滑にすすめる、また、指導していく責任を負っている。その構成は、校長、副校長、各学部主事、各学部委員よりなり、委員長は互選で決定する。委員長は、委員会を統括する責任と、対外的には県知養の理事など、研究活動に関して本校を代表する任務を負う。学部の委員は、学部研究の推進と同時に、全校的に必要な任務を分担し行う。

- ・毎月一回の定例会議を設定し、研究実践活動に関わるすべての問題等について協議を行う。
- ・「研究推進ニュース」の発行等、広報活動の充実につとめ、研究推進に関わるすべての情報を全教員がもてるようにする。
- ・研究出張の円滑な執行を行う。

- ・研究図書等の購入や研究室の整備充実をはかる。

3. 研究推進の具体的な内容と方針

11月19日に実施する「第17回障害児教育研究協議会」にむけてのとりくみを視野に入れながら、以下の点を重視して、具体的なとりくみを展開していく。

(1) 学部研究会の充実

教育実践を進めていく基盤である「学部研究会」の充実をめざす。

①学部ごとに研究テーマ、研究と実践上の具体的な課題を設定する。研究の進め方、内容については年度当初に各学部で方針をもつようにする。研究推進委員会でも論議を深めていく。

②児童・生徒の実態把握をすすめ、一人ひとりの課題を明らかにしていく。

●「教育実践カルテ」の作成、検討、活用の充実をはかる。

- ・「障害をみつめ、発達にそくし、生活実態にねざした」という観点を大切に作成する。

- ・集団で協議することを通して子どもを見つめていく視点を広げ、課題の共通理解をめざす。

- ・日常の教育実践に生かしながら、さらに検討を加え、課題、働きかけをより明確にしていく。

●必要に応じ、発達検査・発達診断を実施し、課題を明らかにしていく際に活用する。

③授業実践の力量を高めていく。

●指導計画の作成

●実践記録の作成

●学習会の設定

●資料の保管、整理

(2) 全校研究会

出版した本の内容をもう一度教師集団で検討しあい、内容を深めるとともに、今後の課題を出し合う。そのため、各章ごとに4回の全校研究会を開催する。年度末には各学部のとりくみ、グループ研究会のとりくみの総括会議を行う。また、教師の問題意識に応えた研修会も設定したい。

(3) グループ研究会

学部をまたがったグループによる研究会。本の章ごとに3つのグループを編成する。研究協議会ではこのグループ別に分科会を設定する。各章の内容を深めるとともに、研究協議会の分科会の準備も行う。

第1グループ 教科とコミュニケーション

第2グループ 学びあい、育ちあえる集団づくり

第3グループ 物ををつくって自分をみがく生産学習

(4) 研究出張

他校の研究や実践を学ぶ、また、本校との交流を深める機会として積極的に参加していく。内容の報告については、研究会やニュースを活用し、全教員に知らせる。

(5) 広報活動

「研究推進ニュース」の発行計画をたて、研究実践のとりくみ内容や出張報告を掲載する。学部研究のとりくみ状況をはじめ、グループ研究会、全校研究会のとりくみも網羅し、全校で学び合うこと、確認しあうことを大切にする。

(6) 研究図書の購入、活用、整備

購入希望をとり、研究図書の充実を図る。夏休みに図書の整理を行う。

(7) 研究集録の発行

今年度の研究と実践をまとめ、本校の年次記録としても位置づけ「研究集録No.32」を刊行する。

(8) 対外的な諸課題

① 発達科学部との連携

学部とのコラボレーション委員会をととして学部との共同研究を進める。また、第17回研究協議会を学部との共催で開催し、研究会の充実を図る。

② 県知養、近知養、教大協などとの連携

兵庫県や近畿の養護学校研究協議会（県知養、近知養）との連携をすすめていく。

教育大学協会特殊教育部会（鳥取大附養）へも積極的に参加していく。

(9) 地域との連携

① 「障害幼児親子教室」の開催

「障害幼児親子教室（たんぼぼ教室）」を実施する。子育てに不安を抱える保護者の相談活動、障害のある子どもの保育を行うことで、地域の子どもたちの実態を捉え、これからの障害児教育のあり方を探る。

② 担任者会

明石市内障害児学級担任者会（小・中学部）へ参加し、実践や研究についての交流をすすめる。

③木の根学園との懇談

木の根学園との懇談会（高等部）を今年度も実施する。

4. 研究推進の活動の総括について

本校では2年に一度障害児教育研究協議会を開催している。ここではすべての学部において公開授業を行い、実践を通して問題提起をし障害児教育に携わる多くの方々と議論を交わしている。今回の研究協議会は「コミュニケーションの関係がひらく障害児教育」の出版記念と位置づけて開催したが、まさしく本の出版をふくむこの2年間の研究実践のまとめと問題提起となった。

障害児教育における指導の個別化についてはこれまで批判をし、学校教育における集団の大切さを主張してきた。特別支援教育では、この指導の個別化がさらに強化される傾向にある。障害児教育が制度として大きく変えられようとしている今、集団で指導することが大切であること、集団の育ちの中で個が豊かに育つこと等、これまで実践で培ってきたものをもう一度確認し、障害児教育関係者に提起することの意義は大きい。

まず今年度は、本の各章ごとに論議を重ねてきた昨年度のとりくみを教員みんなの財産にするために、1学期には全校研究会を重ね、すべての章について全校で論議し意見や疑問を出し合った。これらの意見・疑問は2学期以降のグループ研究会に生かされることとなった。

2学期のグループ研究会は研究協議会の分科会運営を視野に入れて、分科会で提起する内容の検討を行ったが、ここでは1学期に設けた全校研究会での意見を基に議論を深めることができた。

研究協議会においては、報告はできるだけ要約し、協議の時間を多くとった。本校教育に共感を持ってくれる参加者も多く、議論が深まったが、自閉症児に対する個別指導の必要性についてや特別支援教育のモデル的なとりくみ、生産と就労の関係についてなど、多くの意見や質問が出され、各地で行われている実践の交流ができた。形態は違っていても子どもの発達をどう保障するのか、教師の専門性は何か、と、同じ視点にたって協議を進めることができたように思う。

今年度の研究協議会のとりくみ、グループ研究会のとりくみのなかから新たに生まれた課題、引き続きの課題が明らかになってきている。

3学期には、グループ研究会の総括、各学部研究会の総括を行い、来年度以降の研究実践のあり方についても検討を行った。

日常的には学部を基礎に実践を行っているので、研究においても学部研究が基本となるが、グループ研究会のように学部をこえて互いの実践を知ることによって授業や子どもの見方を深めたり変えたりすることができ、教材を分析する力も育つ。職員集団の力量を高める上で、グループ研究会や全校研究会を有効に取り入れていくことが必要である。また、今後の研究については、小・中・高3学部のつながりだけでなく、就学前、卒業後のことも視野に入れた研究が望まれる。進路指導や移行支援の問題とからめた課題設定も必要になってくるであろう。特別支援教育、法人化の潮流のなかで附属の位置というものを考えたとき、他校の実践や情報を知ることによって私たちの実践力、理論を高めていくことは重要で公開全校研究会の開催も検討していきたい。

※研究推進の具体的な内容の総括

(1) 学部研究会の充実

学部研究会の総括は、各学部の研究と実践の総括に委ねる。基本的には、毎週1回（木曜日）を学部研究会として保障してきた。週1回では不十分であり、学部ごとに時間を捻出してとりくみをすすめてきた。議論を深めるためにはやはり、時間も必要である。学習、資料の作成等個人の努力とともに、計画的・効率的な学部研究を引き続き追求していく必要がある。

(2) 全校研究会

出版原稿「コミュニケーションの関係がひらく障害児教育」をもとに協議を行った。

第1回 6月6日（月）

第Ⅲ章を読む。「生産学習と自分づくり」

第2回 6月13日（月）

第Ⅱ章を読む。「仲間との出会い」

第3回 7月22日（金）

第Ⅰ章を読む。

「教科教育をひらく」

第4回 7月28日（木）

序章、第4章、終章を読む。

第5回 3月15日（水）

今年度の研究実践のとりくみのまとめを行う。

特別支援教育について学び合う。

この全校研究会は再度、全員が一通り本を読む機会になった。事前に学部研でもとりあげ、学部の中で疑問点などをだしあう機会を設けたので、他学部からの疑問・感想など多く出された。研究協議会のプレ企画のよ

うな内容になり、報告内容をまとめる上で参考になった。

(3) グループ研究会

第1グループ 教科とコミュニケーション

第2グループ 学びあい、育ちあえる集団づくり

第3グループ 物をつかって自分をみがく生産学習

本の章ごとにテーマを設定し、年間6回のグループ研究会をおこなった。1学期の全校研究会で、各章に出された意見・疑問などからさらに内容を深め、研究協議会の分科会準備を行った。協議題の検討、資料の作成、提案内容の検討を行い研究協議会に臨んだ。協議会后、総括会議を行いグループ研究会のまとめを行った。今後学部をまたがった集団による研究会をどう設定していくかは課題である。

(4) 研究出張

県知養、近知養の研究会など、年度始めには出席予定をしていた研究会にも、日程の調整がつかず、あまり参加できなかった。予算どおりの執行ができなかったが、来年度もできるだけ出席する方向で考え、予算もそれに見合った予算を組んでいきたい。夏季休業中をはじめ休日に学習会・研究会参加の希望は多かった。多少ではあったが旅費の補助を行った。

(5) 広報活動

研究推進ニュースについては、年間6号の発行を行った。不定期の発行になってしまった。研推ニュースから情報を得、学ぶという活動も大切にしていきたい。

(6) 研究図書の購入、活用、整備

夏休みに図書の整理を行った。図書購入については、希望をとる形で進めてきた。個々の希望に応えるとともに、購入計画をたてることで、図書を充実させ、整備していきたい。

(7) 研究集録の発行

今年度の年次記録として「研究集録No.32」を刊行する。

(8) 対外的な諸課題

①1学期に学部とのコラボレーション委員会を開き、第17回障害児教育研究協議会を学部との共催で開催することを確認した。協議会においては、分科会の共同研究者として分科会に参加していただき私たちの実践

内容に関するアドバイスをいただいただけでなく、特別支援教育についてのシンポジウムの開催、教育相談の実施を担当していただいた。協議会で明らかになったこと、課題として残ったことなどを引き続き、発達科学部と連携しつつ深めていく方向を探りたい。

②県知養、近知養、教大協などとの連携

今年度も教大協研究集会（鳥取大附養）に参加した。県知養、近知養研究会の出席は、行事等の関係もあり、年々難しくなっている。出席できる方向を今後も探っていく必要があるだろう。

(9) 地域との連携

「障害幼児親子教室」（たんぼぼ教室）を10回（月に1回土曜日開催）開催した。毎回10組以上が参加し情報交換が行われている。

担任者会にもできるだけ参加してきた。研修会などは、参加できなかった会が多くなってしまった。本校を会場にして会議行なうなどのとりくみも検討していけるだろう。

高等部では恒例となった木の根学園との懇談も行った。引き続き、指導内容面でも話し合いを持つなど、連携をとっていきたい。

小学部では附属明石小学校との交流教育を実施。居住地交流では2件の実施であった。

（文責 研究推進委員会委員長 西堂 直子）